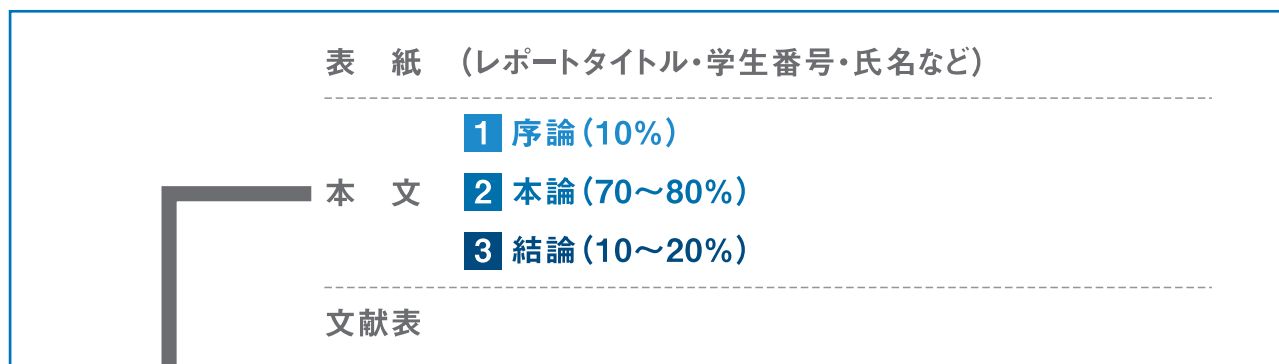


2. レポートの構成

レポートには守らなければいけない構成形式があります。高校までの感想文・小論文は、構成形式が自由でしたが、大学生の書き方として構成形式に注意してください。

レポートは、あるテーマのもとで、ある問題に解答を与える「問題—解答」という形式をしていなければなりません。問答形式と言っても良いでしょう。事実と意見、他者の考えと自分の考えを区別すること、自分の主張の根拠を示すこと、自分の主張に対して違う意見や考え方があることを想定し、それに対する応答をすることなどが重要です。



1 序論 10%程度

テーマと問題への導入。
仮説を提示し、結論を
予告する。

1. テーマの導入

テーマとは、研究や調査の対象になる領域や範囲のことを言います。

たとえば、「グローバル化についての批判的検討」とか、「アメリカの現代の外交」とか、「夏目漱石の文学の一考察」といった大学の講義のタイトルになるようなものです。

テーマの導入では、たとえば、「なぜ、本論で、グローバル化を論じる必要があるのか」など、そのテーマを論じる今日的・社会的・学問的意義を明らかにします。講義の目的や講義内容を見直して、テーマの意義を確認することも重要です。

2. 問題の設定

問題とは、テーマについて立てられた問いのことです。たとえば、「グローバル化によって日本の国内製造業は衰退するか」とか、「オバマ大統領の外交は前大統領とどの点が違うか」とか、「『吾輩は猫である』は、出版当時どのように評価されていたか」などの問題を立てましょう。問題はできるだけ具体的に、問いの形で立てると良いでしょう。その基礎になるのが仮説です(「1. レポートの基礎」(pp.3-4)参照)。

3. 結論と展開の予告

本論においてどのようなことを論じ、最終的に、どのような結論を示せるのかを簡潔に示します。さらに、章の順序を追って内容を簡単に予告します。

2 本論 70~80%

レポートの中心部分。主張を立証することを目指して、文章を記述する。必要に応じて議論を行う。

**1. 主張の立証**

主張は、根拠によって支えられなければなりません。

たとえば、「グローバル化によって日本の国内製造業は衰退しない」という主張をしたいときには、その根拠を挙げる必要があります（「グローバル化によって輸入される製品は、国内製品と競合しない」など）。

なお、立証にあたっては客観的なデータ、学術資料、広く認められた研究成果などを活用します。それらを根拠として示すことによって、各自の主張はより説得力のあるものになります。

2. 主張の批判的検討

ありうる反論を想定し、それに再反論を加えたり、ありうる代替案を想定し、その代替案よりも自分の主張のほうが優っていることを示します。そうすることによって、自分の主張がより強固になります。

3 結論 10~20%

序論の問題に解答する部分であり、ここで論文の主張を明確に打ち出す。

1. 要約

まず論文の趣旨(テーマの意義と問題の設定)を確認し、本論において何を論述してきたか、論文全体を簡潔に要約します。

2. 結論

本論で論じた内容から導かれる最終的な結論を、論理的に明確に打ち出します。あくまでまとめるだけの部分であり、新しい議論を加えないほうが良いでしょう。

書式を守ろう!

大学のレポートは、指定された書式を守る必要があります。書式とは、たとえば下記のようなことです。

- 氏名・学生番号・授業科目名などをどこに書くか
- 表紙を付けるか否か
- 縦書きか、横書きか
- ページ番号が入っているか
- 参考文献リストはつけたか
- 指定された字数を守っているか

たとえば、「4000字程度」と言われたら、3600~4400字(±10%の範囲内)に、「4000字以内」と言われたら、3600~4000字(上限字数の90%以上は書く)に収めましょう。

注や文献表、表題部(タイトルや執筆者の氏名、提出日などを書いた部分)を指定字数に含めるかどうかは、教員の指示によって異なりますので、確認してください。

書式は色々ありますが、指示されたことを守ることが必要です。しっかり確認しましょう。